

うめくさ-3

明治時代の論文では「雑草」より「害草」が優勢だった？－雑草学再読－

「雑草」の用語と定義は古くて新しい問題で、最近でも萩本宏先生が、生態学的な植物の区分として「山野草、人里植物、農草、新帰化植物」を提案して論議を展開されている（雑草研究46:56-59, 2001）。そこで、「雑草学（半澤洵 1910）（図-1）」の「第一章 雑草の解 第一節 雑草なる語」を改めて読んでみた。この部分は「雑草防除大要（植木邦和・松中昭一 1972）」の11頁に要約されているが、以下にほぼ全文を転載させて頂く。

（図-1）」の「第一章 雑草の解 第一節 雑草なる語」を改めて読んでみた。この部分は「雑草防除大要（植木邦和・松中昭一 1972）」の11頁に要約されているが、以下にほぼ全文を転載させて頂く。

雑草なる語は、近來の出版にかゝる農業書、並に農事に関する記事中一般に使用せられ、吾人の使用する土地即ち田圃、路傍並に牧草地等に発生する無益有害の植物を指示すれども、元來斯かる意義に解釈すべきものにあらざして、「言海」並に「ことばのいずみ」等には、「種々の草」又は「さまざまの草」と解し、一年ごとに枯死する凡百の草本を以て、総て雑草となせり、又本草書にては、効用並に性状の不明なる草本を集めて、雑草類なる部門を設け、以て菜蔬、藥草、花草、園草、菰、蔓草、芳草、水草並に海草類等と區別せり、又支那に於ては、普通の草本類の総称に止まるが如し、例へば漢書閩賈國傳に「閩賈地平温和有目宿雜草奇木檀檉梓竹漆」と云ひ、又江淹杉木頌に、「羣木斂望雜草不窺」と記せり。

而して又本邦及び支那に於ける、往時の農業書並に農事に関する記事中には、雑草なる語の記載せらるるを見ること極めて稀にして、只僅かに天保十一年（紀元二千五百年）の出版にかかる、農家須知なる書中「油氣の物肥しに利く道理を説ける項に

「雑草は春の陽氣を得て目立しものゆゑ、稲に入れて其陽氣がきくなり、されど火の氣少なければ溜まりへ入れ、風呂にて湯をわかし、打ちこみくさして遣ふべし云云」

とあるのみ、其他の農業書等には皆、「草」又は「田草」と書けり、而して萬葉集並に夫木集には、

『しづのをがしげる稲葉のさみだれに晴間を見てや田草引くらん』

とあり、又農隙餘談（天明三年紀元二四四三）には「田草は手入事要なり」、農術廣益録（寛政二年紀元二四五〇）には「田草採様の事」あり、農暇必讀（安政六年紀元二五一九）及び農業餘話には「草害」の記事あり、夫記事中には、

『夫稲を害するは草なり、草は其田に自然に生じ縦に蔓れば害となること目前なり云云』とあり。

又支那にても、單に「草」と書き又「穢」、「狼莠」、「稊」、「藎」並に「惡草」等と書けり、今其一二の例を挙げれば、詩經には「耘除草也」、左傳には「農家之務去草」、齊民要術には「勿以無草而暫停」、陳旉農書には「耘耨之草」、農桑通記には「狼莠不除、則禾稼不茂」、羣芳譜には「去草蓋淨」、又「草淨為佳」、天工開物には「凡耨草用潤面大鐮」、又「耨草之功」、種樹書には「不及時去草、必為草所蠹耗」、蘇軾續歐陽子朋黨論には「君子如嘉禾也、封植之甚難、而去之甚易、小人如惡草也、不種而生、去之為最難」、又戴良詩に「請為語此鄰、早把惡草除」とあり。

然るに本邦近來の出版にかかる農業書に在ては、往時の「草」又は「惡草」と書ける場所に、雑草なる語を使用して、英語のWeed、独語のUnkrautに相當せしめ、又英和並に独和辞典等にはWeed並にUnkrautの譯字として之れを使用せり、則ち農業書に在ては、稲垣氏は「雑草」とは「作物にあらざして田畑に生ずる草類なり云云」と云ひ、横井氏は「栽培家の目的物にあらざして圃間に生ずるものなり云云」と云ひ又森氏は「耕作せんとする目的植物の外に同所に生ずるものなり」と云へり。

是れによって之を觀るに本邦に於ては、雑草なる語の解釈は二様に分たれ、「言海」等にては「種々の草」即ち「雑多なる草」と解し、農業書並に英和独等の辞書にては、「雑入する草」又は雑兵並に雑席等の雑字の如く、「やくざなる草」又は煩雑並に困難なる草、即ち「わづらはしき草」又は「厄介なる草」又は「邪魔なる草」との意味を現すに至れり。（後略）

「雑草」の語に複数の意味があることを前提に、農業で問題となる植物に焦点を当てて「雑草学」を記述されたことがわかる。

さて、「雑草学」の引用文献にあたる「邦文雑草参考書類目録」には「雑草艾除法二関スル記載」として54編、「一般雑草ノ記事」として24編の論文・記事が収録されている。これらのタイトルをみると、例えば「鎌田金作 蛭藻絶滅法（農業雑誌）」のように具体的な種名を使用する例が多いが、「雑草」や「害草」の文字を含む場合もかなりある。「雑草」と「害草」は、「雑草艾除法二関スル記載」と「一般雑草ノ記事」ではそれぞれ3、

10編、「一般雑草ノ記事」では6、1編にそれぞれ使われている。

他に「田草」と「草害」があるが、「雑草艾除法二関スル記載」では圧倒的に「害草」が多く、この時代の論文ではこちらが優勢であったことが伺える。

半澤洵先生（1879-

1972）の生涯は、「明治以後の物故植物研究者の伝記文献（日本植物学百年の歩み 1982）」によると「米寿記念半沢洵先生業績目録（1966）、雑草研究15巻頭（1972）、半沢洵 北海道大百科事典下巻（1981）」に収録されている。雑草研究の記事は沼田眞先生の追悼文である。この他に、「うめくさ2」で触れた「世界の雑草学の開祖 半澤洵（竹松哲夫1984）」に加えて、「応用菌学の泰斗 半沢洵」が「白石歴史ものがたり（札幌市白石区老人クラブ連合会編 1978）

にある。札幌郡白石村は先生の生地である。純粋培養した納豆菌による糸引納豆製造技術の開発、普及が半澤先生のライフ・ワークで、ついに、札幌の納豆容器改

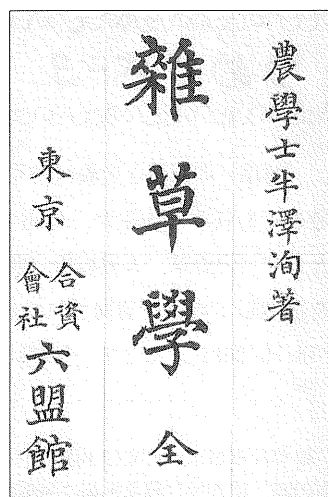


図-1 半澤洵著「雑草学(1910)」

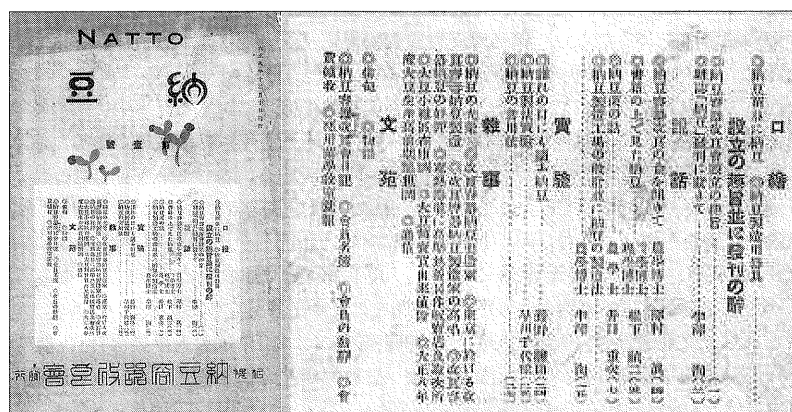


図-2 半澤先生が力を注いだ雑誌「納豆」の創刊号

良協会から年刊の雑誌「納豆」を刊行され、1919年の創刊号（図-2）には「雑誌「納豆」発刊につきて」の巻頭言をはじめ多くの記事を書かれた。この雑誌の末尾には「応用菌学教室彙報」の記事がついているから、同講座教授としての半澤先生の納豆への情熱がすべて注ぎ込まれたものと言えよう。

「雑草学」は古書業界にも出てこなくなった。筆者の知る限りでは、1981年に関東地方の某書店の古書目録に載ったのが最後である。（モ）